

翻訳

大学というものの観念  
(The Idea of a University)

マイケル・オークショット  
桜井 直文 訳

〈翻 訳〉

## 大学というものの観念 (The Idea of a University)

マイケル・オークショット  
桜井 直文 訳

### 訳者解題

以下に紹介するのは、イギリスの政治哲学者マイケル・オークショット（1901-1990）が、大学教育とりわけ教養教育の意味について論じたつぎのみじかいエッセーの全訳である。

Michael Oakeshott, *The Idea of University*, in *The Listener* 43, pp. 424-6, 1950. (のちに, Michael Oakeshott, *The Voice of Liberal Learning*, Yale University Press, 1989; repr. Liberty Fund, 2001. に収録。)

初出の年をみてわかるとおり、このエッセーが書かれたのは先の大戦の直後である。そんな昔に書かれた文章が、いま読んでみてもけして古びてはおらず、そのみずみずしさをなお保っているように見えるのはひとつの驚きである。もちろん、行間から、戦後の（アメリカ的な？）プラクティカルな方向での教育改革にたいして抵抗しようとしていたオークショットのすがたもまた、かいま見える。このエッセーが、『リベラル・ラーニングの声』というかれの教育論・大学論を集めた論文集に収録されてふたたび日の目をみたのは、一九八九年のことである。八〇年代の後半とは、六〇年代後半から七〇年代にかけての大学をはじめとする教育の場を舞台にしてのいわゆる「若者の反乱」がようやく収束し、その間、価値多元主義やサブカルチャー重視といった当時の教育のなかにあらたにとりこまれた要素にたいする反省があらためてなされはじめた時期にあたる。こうしたとき出版され、とりわけアメリカの大学関係者の話題を独占した本が、アラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』Allan Bloom, *The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, Simon & Schuster, 1987. だった。ブルームの批判の矛先はまさに、こうした大学の「ポップ・カルチャー化」にあり、魂を無気力にする価値相対主義の「病い」から学生のこころを目覚めさせ、自由とデモクラシーという「アメリカン・マインド」に立ち返らせるためにも、大学における伝統的な古典教育の復権が必要であると主張したのである（よく知られているように、ブルームは、今日のアメリカの政権をささえている「ネオ・コン」

の論客たちの精神的な「父」である。ちなみに、その「祖父」は、これもよく知られているように、ブルームの師、レオ・シュトラウスである)。オークショットの上記論文集が出版されたのは、このブルームの本の二年後であるが、これは決して偶然ではない。このことは、同論文集の序文を書いたフラー Timothy Fuller が、その序文の末尾でアラン・ブルームの一件にわざわざ言及していることからわかる (*loc. cit.*, p. xxxii et seqq.)。ブルームが指摘している大学の「頹廢」について、その診断にうなづく人びとも、だからといって、そのすべてが、ブルームの処方箋をも受け入れるわけではない。オークショットもまたそうした(ブルームの意見に留保する)人びとに属する。オークショットにとって、大学というところでもっともだいじなのは、かれのいう「会話」がなりたっているということであり、人びとが「会話」のしかたをわきまえているということ(オークショット的にいえば「会話人 conversationalist」であること)なのである。そうした大学における「会話」の可能性を閉じようとするものは、それがプラクティカルな方向性であれ、また、ブルーム的な古典教育のおしつけであれ、オークショットの組みするところではない。かれの大学教育論をあつめたものが、八九年にあらためて出版されたのは、いわゆる「六八年」的でも、また、ブルーム的でもない第三の立場の可能性を(まさにブルームのまきおこした波紋のあとに)あらためて人びとのあいだで確認したいということであったのではないだろうか。そしてその十二年後の二〇〇一年、この論文集はふたたび復刻出版されている。今回訳出した論文が書かれた年から数えるとなんと半世紀あまり。二十一世紀にはいった今日においてもなお、かれのことばを必要とする状況がふたたび生じていると言うべきだろうか。いずれにしても、大学が大学でなくなるとうしているとき、オークショットのことばは、それにたいする警鐘としてつねにくりかえし聞かれ、読みかえされなければならない、といえるだろう。

オークショットの主要著作は、上記論文集以外に、*Experience and Its Modes*, 1933.; *Rationalism in Politics*, 1962. (邦訳に二種あり。嶋津格ほか訳『政治における合理主義』(勁草書房, 1988)と、濫谷浩ほか訳『保守的であること——政治的合理主義批判』(昭和堂, 1988)); *Hobbes on Civil Association*, 1975.; *On Human Conduct*, 1975. (野田裕久訳(抄訳)『市民状態とは何か』(木鐸社, 1993)); *On History and Other Essays*, 1983. などがある。かれの教育論・大学論としては、今回訳出したものが、おそらくわが国ではじめての紹介である。

この翻訳の原型はもとも、二〇〇四年七月一六日に明治大学和泉研究棟でおこなわれたシンポジウム「教養教育の危機」(和泉委員会、明治大学教職員組合、明治大学専任教員連合会の共催。司会、佐原徹哉氏)で、遠藤紀明氏、初見基氏とともに、わたしがパネラーのひとりをつとめたとき、参考資料としてフロアにくぼったものである。この大学でも各所で進行中のカリキュラム等の諸「改革」が、その担い手の善意にもかかわらず、否、その善意のゆえにかえっていっそう深刻に、大学を大学でないものに変えてしまうようなことのないよう、せつに願う。(桜井直文)

わたしがいつも好んで言っている説があります。それは、「理念 (ideals)」とか「目的 (purposes)」ということばで人びとが呼んでいるものはけっしてそれ自体、人間の活動の源泉ではない、ということです。というのも、そうしたことばで呼ばれるものは、[人間の] 行為というものを真になりたせているものを切りつめて表現しているだけなのであって、[人間の] 行為とは、あることをなすときの[身心の] 構え (disposition) であり、かつ、それをどうなしたらいいかということについての知識だからです。人間というものは、実現されるべき目的にころひかれるときにだけ、休息からたちあがって活動しはじめる、というわけではないのです。生きているということは、たえず活動的であることです。われわれが特定の種類の活動に帰属させている目的なるものは、このあるいはあの活動にどのようなしかたでかわるかということについてのわれわれの知識を要約したかたちで示しているものにすぎません。

このことはたとえば、われわれが「科学」と呼ぶ活動においてあきらかにそうです。科学的な活動とは、あらかじめ考えぬかれた目標なるものを追求することではありません。というのも、その活動がいったいどこにたどりつくのか、だれも知らないし、また、想像することもできないからです。[科学においては] われわれがころのなかにあらかじめ想いえがくことができるような完成されたすがたなどないのです。つまり、それによってわれわれが現在どの程度まで到達したかを判断する規準としてたてることのできるような完成されたすがたなどないのです。科学を科学としてなりたせているもの、そして、科学にその動力と方向づけをあたえているものは、到達されるべきものとしてあらかじめ知られている目的ではなく、科学的な探究をどのように遂行したらいいかということについての科学者たちの知識です。科学者たちがおこなう個々の追求やうちたてる個々の目的は、そうした知識にうえからおしつけられるものではなく、そうした知識のなかから生まれでてくるものです。あるいは、もうひとつつべつの例をだしますと、料理人 [コッ

ク]とは、まずはじめにパイについての構想をもち、しかるのち、その構想を実地にためす者のことではありません。というのも、料理人とは、料理法[コック術]に熟達した者のことであって、かれがつくろうと思うものや実際につくりだしたものは、かれのその熟達から生まれでてくるものだからです。あるいは、第三の例をだしますと、ひとは、人生においてなすべき「使命」が自分にはあるのだと思うかもしれません。そして、自分の活動は、その「使命」によって支配されていると思うかもしれません。しかし実際は、逆なのです。というのも、かれのいわゆる使命にもとづく活動は、どうやたらある一定のしかたでふるまえるかということを知っている、ということなのですし、また、そういうしかたでふるまおうとつとめる、ということなのですから。かれが自分の「使命」と呼んでいるのは、かれのこうした知識や努力を切りつめて表現したものにすぎないのです。

そういうわけで、今日、大学の「使命」だとか「機能」について語られていることは、どうも理解できないのです。というのも、そうしたことばで言わんとしていることがなんであるかは理解しているつもりなのですが、そうした言い方が、わたしには、不幸な語りかたのように思われるからなのです。こうした語りかたが前提としているのはつぎのようなことです。すなわち、「大学」と呼ばれるなにかがあって、それは、ある種の[なんらかの目的のためにつくられた]装置であり、十分なお金があればそこからなにか[大学とは]べつのものでつくりだすことができるようななにかであり、「それはなんのためにあるのか」という問いが意味をもつようななにかである、ということです。そして、今日の諸大学にたいする批判のひとつは、それらの「機能」が、そうであってしかるべきほどには明瞭ではない、ということです。[こうした批判にたいして]わたしはまったく驚きません。われわれの大学において、批判されてしかるべきことは山ほどあります。しかし、大学の「機能」が明瞭でないからといって大学にケチをつけることは、大学というものの性格をとりちがえることです。大学とは、ある特定の目的を実現し

たり、ある特定の結果をうみだすための機械ではありません。というのも、大学とは、あるしかたであらわれた人間の活動(a manner of human activity)だからです。もちろん大学が、ある特定の目的を追求しているのだといって自分を宣伝することが必要になることもあるかもしれませんが。しかしそれは、そうしたことを語る相手があまりにも無知なので、かれらにたいしては、赤ちゃんコトバで話してやらなければならない場合や、大学が、自分のところにやってくる人びとをうけとめる自分の能力についてほとんど自信がもてなくなってしまって、自分の偶然的な[非本質的な]部分での魅力にうったえざるをえなくなっているような場合にかぎります。しかし、わたしの印象では、われわれの諸大学は、こうしたことが必要になるほどには、まだ落ちぶれていません。それらは、自分たちが「なんのために」あるか知らないかもしれません。また、自分たちの「機能」についてきわめてほんやりした考えしかもっていないかもしれません。しかし、それらは、そうしたことよりはるかに重要ななにか、すなわち、大学が大学であるためにはどんなふうに住居をしたらいいか、ということまちがいに知っているとわたしは思います。この知識は、[その当事者にあたえられた]自然の賜物ではありません。というのも、それは、ひとつの伝統の知識であり、獲得されなければならないものであり、[したがって]つねに、誤謬や無知とまじりあって、ときには失われてしまうことさえあるものだからです。しかし、この種の知識(そうした知識が完全に失われてしまったことはない)とわたしは信じます)のなかに分け入ることによってしか、大学の「観念」と呼ばれうるものをわれわれが発見することは望みえないのです。

ひとつの大学とは、ある種の活動に従事する一定の数の人びとのことです。中世においてはその活動はストゥディウム(Studium)[努力/研究]と呼ばれました。われわれはその活動を「学びをもとめること(pursuit of learning)[学問の探求]と呼んでもいいでしょう。この活動は、文明生活(a civilized way of living)の特質のひとつであり、まことにその徳のひ

とつなのです。というのも、学者は、詩人、聖職者、兵士、政治家、そして、商人とならんで、文明社会のなかでその場所をもつからです。しかし、大学は、こうした活動を独占しているわけではありません。自分だけの研究場所をもつ隠遁の学者、ある特定の学問分野で有名なアカデミー〔専門学校〕、年少の子どもたちのための学校、それらもまた、それぞれ、この「[学びをもとめる]という」活動に参加していますし、それぞれにおいて尊敬されるべきものです。しかし、それらは大学ではありません。大学を[それらから]きわだたせているのは、学びをもとめることに、ある特殊なしかたで従事しているということなのです。大学とは、それぞれがある特殊な学問分野〔研究〕に献身している学者たちの協力体 (a corporate body) なのです。すなわち、大学に特徴的なことは、ひとつの協同的なくわだて (a cooperative enterprise) として、学びをもとめるということなのです。この団体の構成員は、世界中にちらばっていて、ときに会ったり、あるいは、まったく会わなかったりという人びとではありません。かれらは、おたがいの近くにいつも住んでいます。したがって、われわれが大学について考えるとき、それをひとつの場所として考えることをやめてしまったら、大学というものの性格それ自体をなしている〔重要な〕部分を無視してしまうことになるでしょう。そればかりでなく、大学とは、学びの根拠地 (a home of learning) なのです。すなわち、学び〔学問〕の伝統が保存され、[未来にむけて]おしひろげられる場所であり、学びをもとめる〔学問探求の〕ために必要な装置が集められてきた場所なのです。

大学を構成する学者たちのなかでも、ある人びとは、その余暇をそっくりそのまま学び〔学問〕に献げることが期待されています。そして、かれらの同僚たちは、かれらと会話することでかれらの知識にふれられる利得をもち、[外部の]世間も、おそらく、かれらの書いたものから利益をえます。この種の学者のいない学びの場所は、大学とはほとんど言えません。しかし、他の学者たちは、学ぶだけでなく、かれら自身が教えることに従事します。し

かしここでもまた、かれらがなすのは、ある特殊なしかたでの教育的企てであって、それが大学を〔他の学びの場所から〕きわだたせているのです。教えられるために大学にやってくる人びとは、自分たちがたんなる初心者ではないということを示す証拠を提示しなければなりません。かれらのまえには、教師たちの学識が展示されるばかりでなく、研究のカリキュラムが示され、テストと学位授与がそれにつづきます。こうして、三種の人びとがわれわれが知っているような大学を構成することになります。すなわち、〔純然たる〕学者、教師でもある学者、そして、教えられるためにくる人びと、すなわち、学生 (undergraduates)〔学部生〕です。そして、これらの三種の人びとの存在と、かれらのあいだで成立している諸関係が、「学びをもとめること」とわれわれが呼ぶより広いくわだてのなかでの大学というものの〔他とは区別された〕きわだった場所を決定するのです。

これら三種の人びとの活動を〔一つひとつ〕考えてみることにしましょう。そうした活動についてすこしでも知っているひとはだれでも、つぎのことを知っています。すなわち、学びをもとめることと、情報をえること (acquisition of information) とはちがうということです。これは微妙なちがいです。というのも、情報が十分でないひとは、学識ある (learned) ひとはまず呼べないからです。しかし、学者とは、たんにとるにたらない些末事を集めてまわるひとのことではありません。かれは、自分ももめているものがなんであるかということについてなにごとかを知っています。またかれは、自分が知っていることと知らないことを区別することができます。「あわれな衒学者 (poor pedant)」にたいする世間の侮蔑は、おおくの場合まちがっています。というのも、そうした侮蔑は、学者の活動をその有用性によって判断し、それが役にたたないようにみえるとき、それを衒学的だ (pedantic) と思うからです。しかし、これはいつもの規準なのです。というのも、非難されるべきなのは、直接役にたたない知識の追求でも、学問探究 (scholarship) においては避けられない細部へのこだわりでもなく、たんな

る断片にすぎない学問の断片のあいだをなんのあてもなく手探りで歩き回ることだからです。学問探究はときにそうしたものに墮落することがあります。しかしこうしたことは、世間が考えるほどしばしばおこることではありません。むしろ、大学ほど、こうしたことがおこりにくい場所はほかにないのです。

実際、学び〔学問〕の世界 (world of learning) をつくりあげるものがなんであるかを決定する単純なやりかたというものはありません。というのも、学び〔学問〕の諸部分を正当化すべきどのような明瞭な理由 (たとえば、「有用性」といった) も見いだされえないからです。そうした諸部分が表現しているものは、〔そうした諸部分にさきだって〕あらかじめ考えられている目的ではなく、ゆるやかに変化している伝統なのです。年月がたつにつれ、あたらしい諸研究が地平線のうえにすがたをあらわし、ふるい諸研究は、そうしたあたらしい諸研究と接触することによって若返ります。学者のひとりひとりが、ある意味での専門家であって、ある選択された領域を開拓しているということは避けがたいことです。しかし、こうした領域がきわめて狭い領域にとじられていることはめったにありません。また、ひとりの学者はしばしば、ひとつの研究からつぎの研究へとくら替えし、かれの中心的な仕事ではないことながらも鼻をつっこむことがあります。しかし、それにもかかわらずやはり、学びをもとめること〔学問の探求〕は、断片的なくわだてであるようにみえるかもしれません。そして、そのようにみえるのは、〔そうした学問探求が〕たんに外側からのみみられているからだと思われるとしても、それでもなお、そうした〔学問の〕探求の全体に一貫性とつりあいをあたえるためのある種の上位の統合力がもとめられているのではないかと、たずねてみることは、けっして不自然なことではないように思えます。おそらくつぎのような問いがたてられるでしょう。すなわち、われわれにはある地図、すなわち、学びの世界の諸部分どうしの関係が明瞭に示されているような地図が必要ではないか。また、ちょっとした接着剤でもって全体をひとつにま

とめるなら、そうした全体がもっとよくなるのではないかと、といった問いです。そして、こうしたことをもっともつよく感じているだれかが、諸科学のあいだの隙間に「文化」と呼ばれるネバネバするなにかを注入しにあらわれるということになるのです。しかも、きわめて必要とされているなにかを自分たちは供給しているのだという信念をもって。しかしながら、こうした診断も、また、その治療法も、悲しむべき誤解から発しているのです。

学びの世界は、それをひとつにするために、そこから注入されるセメントのようなものをまったく必要としていません。というのも、その世界の諸部分は、単一の磁場のなかで動いているからです。そして、その隙間を埋める必要が生じるとすれば、それはただただ、〔そこに流れていた〕電流がいわれなく切断されてしまったときにかぎるからです。学びをもとめること〔学問の探求〕は、競争者たちが最善の位置を争うレースのようなものではありません。議論することやシンポジウムのようなものですらありません。それは、ひとつの会話 (conversation) なのです。そして、大学 (すなわち、おおくの諸研究の場所としての大学) の特有の徳とは、そうした学びの探求を、この〔会話という〕性格において示すことにあります。すなわち、それぞれの研究は、〔会話における〕それぞれひとつの声としてあらわれ、その声のトーンは、暴君的でも悲嘆的でもなく、つつましく、会話に適した (conversable) トーンなのです。会話には、議長は必要ありません。あらかじめさだまったコースもありません。われわれはそれが「なんのため」の会話なのかと問うことはありません。そして、その会話の卓越性をその結論で判断することはありません。というのも、会話には結論はなく、会話はつねに他日にくりのべされるものだからです。会話の統一性は、うえからおしつけられるものではなく、語っているもろもろの声の性質からわきでてくるものです。そして、会話の価値は、それに参加する人びとのところにそれが残す余韻のうちにあるのです。

そういうわけで、学者とは、学びの活動に従事するしかたを知っているひ

とのことです。ですから、かれの本来の声は、説教者や「基本的な知識を教える」教師 (instructor) のそれではありません。しかし、学者のなかに教師 (teachers) がいるということ、そして、大学とは、なにかを学ぶことができるという期待をもってひとがいくところであるということは、驚くべきことではありません。すべての学者がよい教師になる親和性を持っているとはかぎりませんが、しかし、ほんものの学者はすべて、本人がそれを意図するしないにかかわらず、学びのもとめかた「学問の探求の方法」についてかれの知っていることのいくばくかを、それがわかる人びとにたいして伝えるものです。かれの教える力がうまれでくるみなもとは、かれの知識の力と靈感にあります。つまり、かれが、学びをもとめるということのなかにひたされているということのうちにあります。そうしたことは、学者になろうなどとほとんど考えたことのない人びとにすら感じとられるものです。また、その学識と「教師としての」親和性が十分にあり、自分の知っていることを伝える能力をなみはずれてもっている人びとですら、完璧な「基礎知識を教える」教師 (instructor) とはちがう何者かであると考えられなければなりません。かれらは、もろもろの「学問的な」規則を知っているという点で信頼できるかもしれません。しかし、かれらにとって、結論を教えることはさほど重要ではないのです。ある種の美術学校にいけば、ネコをスケッチするための十とおりの方法や、目を描く際におぼえておかなければならない一ダースもの技法を教えてもらえるかもしれません。しかし、教師 (teacher) としての学者が教えることは、スケッチしたり描いたりするしかたではなく、もの見かたなのです。かれは自分の言いたいことを容易にことばにできるひとかもしれないし、また、自分自身の疑いやためらいをなかなか投げ捨てられないひとかもしれません。しかし、それがかれが学者であるということなのですが、ある特定の声をもたずに語るということは、かれの「学者としての」性格には属していないのです。そして、かれは、つぎのような学び「学問」の通俗化とはいっさい関係をもたないでしょう。すなわち、学びを

たんに試験に受かるための手段とみなしたり、資格証書をえるための手段とみなしたりするといったことです。

しかし、大学は、個々の学者の教える力をこえるある教える力をもっていると考えられるかもしれません。大学とは、その靈感をひとりの秀でた人間からひきだしているアカデミーではありません。というのも、大学とは、学者たちの団体 (a body) であって、かれらは、個人的であれ学問的であれ、さまざまな不完全さをもっていますが、おたがいのそうした不完全さをたがいにおぎないあっているからです。大学は、おおくのさまざまな種類の教師をかかえています。それぞれの種類の教師たちは、他の種類の教師たちとのまじわりから自分たちの力をひきだしているのです。自分の考えを容易にことばにできる才能をもったひと「学者」を「なにかの機会に」われわれが推薦するとしましょう。かれは、すべての質問にたいしてととのった答えをあたえてくれるでしょう。しかしわれわれがころにとめておかなければならないことは、かれは、たんにこのうえなく活発な精神をもった人間であるというだけでなく、しばしば、つぎのような人びとのスポークスマンでもあるということなのです。すなわち、自分の考えをことばにだすことはそれほどじょうずではないが、おそらくはより深い、そして、独創的な精神のもちぬしであって、かれは、そうした人びとと毎日接しているのです。すなわち、かれらがいなかったら、かれもほとんど存在しえないのです。そういうわけで、大学とは、人類の弱さと無知にきわめてよく適合した制度なのです。なぜなら、その卓越性は、ひとりの万能の天才の登場に依存しているわけではないからです。たとえ、そうした天才があらわれたとき、そうした天才に場所をゆずるしかたを大学がわかまえているとしても、さらにつけかわえるならば、大学は、下院やふるくからおこなわれてきた商売においてと同様、なにかを、それをことばにだして教えるというのではないしかたで伝えます。そして、そのようにしてそれが伝えるもののなかにすくなくともあるのは、会話のやりかた (manners of conversation) なのです。

学者、教師、そして、最後にくるのが、教えられるためにやってくる人びと、すなわち、学生 (undergraduate) です。学生であるかれ、あるいは、彼女もまた、[他の大学構成員とはちがう] きわだった性格をもっています。まずはじめに、かれは、子どもでも初心者でもありません。かれはすでに、どこかほかのところで学校教育をうけ、外海で [の航海で] 自分をためしてみるのに十分なほど (道徳的にも知的にも) 学んできているのです。かれは、子どもでも大人でもなく、ある奇妙な人生の中間点にたっています。この時期、かれは、自分自身について、また、自分のまえを通過する世界についてある程度のことを知ってはいるのですが、ただし、それらについてさらに多くのことを知りたいと思うのに十分なだけ、そのかぎりでは知らないのです。かれはまだ、かれの愛するものをみいだしていません。しかし、[自分にはない] 時間や偶然的なできごとやライバルにたいする嫉妬もまた知りません。おそらく、おとぎ話のなかのきまり文句がかれにはもっともふさわしいでしょう。すなわち、かれは、自分にとっての知的なたからもの (intellectual fortune) をさがしにやってきたのです。しかし、さらに言うと、かれは、学校から大学にやってきた最初の人間ではありません。かれは、なにを [大学で] 期待すべきかということについてなにも知らず、したがって、大学にやってきたら、すべてのことをやさしいことばで説明してやらなければならないような異邦人のような存在ではありません。そして、かれが属していた伝統がかれにすでになにごかを教えていたとするなら、その伝統はかれにつきのことも教えていたでしょう。すなわち、かれは、大学の三年間のあいだに、かれの知的なたからものをいっぺんにみいだすことはないだろう、ということです。したがって、われわれはそう想定するのですが、かれは、かれがこれから見いだすことになるものと折り合うことができるし、それを利用するこころの準備ができています。と。

ところで、かれはいったいなにを [大学で] 見いだすのでしょうか。かれが不運でなければ、かれが見いだすのは、力強いあふれるばかりの活動の流れ、

学びをもとめることに従事する男たちと女たち、そして、この活動になんらかのしかたで参加するようにとの誘いです。こうした誘いは、学び [学者] の生活にはிரいたいと思う気持ちにすでに動かされている人びとにも、また、そうした気持ちをまったくもたない人びとにもひとしくむけられます。大学とはけっして、学者を養成するためのしくみではありません。というのも、大学が理想とするのは、学者ばかりが住人となっているような世界ではないからです。イングランドにおいてはこの約四百年間、学者になる人間のための教育と俗人のための教育とはずっとおなじでしたし、この伝統は、大学についてわれわれがもつ観念の一部をなしています。

こうしたことにくわえて、大学は、学生にたいし、ある一定の範囲での多様な諸研究を提示し、そこからかれが選ぶことができるようにしていることがわかるでしょう。というのも、当然のことなのですが、大学は、それが教えることがらについて、取捨選択をくわえていますし、また、学者たちの注意をひきつけているすべてのことがらが、学生の勉強に適していると考えられてはいないからです。[教えられるべき] 個々の科目の選択がどこからくるか、ということはなかなか言いにくいことです。あるものは古くからあるものであり、あるものは新しい。あるもの (たとえば、医学や法律) はなかば専門的な科目のようにみえますし、他のものは、その世間とほとんど直接的関係をもちません。確実にいえることは、これらの諸研究のどれをとってみても、それらが大学のカリキュラムのなかでその場所をもつとすれば、それは、つぎのような理由によるものではない、ということです。すなわち、それが専門的に有用であるといった単純な理由によるものではなく、また、当該の知識が教えやすく、また、テストしやすい、といった理由によるものでもない、ということです。実際、[大学で教えられる] これらの諸研究のすべてに共通する唯一の特徴は、それらが、学問探究 (scholarship) の認知された領域であるということです。というのも、それぞれの研究には、学びをもとめることが反映されています。したがって、それぞれの研究には、



それ自身の内部に、(もしわれわれがその研究の内容をふかく飲みこむならば) [ひとを] 教育する力があるからなのです。それらの諸研究は、全体として、すくなくともその概略においてではありますが、大学のなかで遂行されている [あの] 会話を表現しています。そして学生は、自分の大学を、ひとつの声しか聞こえてこない専門学校 (institute) や、マニュアル化したさまざまな声しか教えられない技術専門学校 (polytechnic) ととりちがえるようにまよわされることはけっしてないのです。

そういうわけで、これこそまさに、学生にとって、大学を [他のものから] きわだたせているしるしなのです。というのも、大学とは、かれが、かれの教師や仲間やかれ自身と会話することにおいて教育の機会をもつ場所であり、また、かれが、教育をつぎのようなものと混同するようながされることのけっしてない場所だからです。すなわち、職業のためのトレーニングだとか、商売のための秘訣を学ぶことだとか、将来つくことになる社会における特定のサービスのための準備だとか、かれが人生をきりぬけるのに役立ついわば道徳的・知的道具一式を獲得することとかと、混同することのけっしてない場所だからです。この種の将来の目的なるものがすがたをあらわすときにはいつも、教育 (それにとって問題なのは個人であって機能ではありません) は、勝手口から音もなくもれさってしまうのです。それがもたらす権力のために学びをもとめることは、強欲なエゴイズムにその根をもっています。そしてこのエゴイズムは、それがいわゆる [将来学生が実現すべき] 社会的な目的 (social purpose) というすがたをとってあらわれるときにも、だからといって、よりエゴイスティックでなくなったり、より強欲でなくなったりするわけではありません。そしてこうしたことと大学とは、なんの関係もないのです。大学のカリキュラムのかたちには、このような意図はまったくありません。そして、大学での教えかたにも、このようなもくろみはまったくないのです。教師が関心をもつのは、生徒自身であり、生徒がなにを考えているかということであり、かれのこころの質であり、かれの不死の魂であっ

て、その生徒がいったいどんな教育指導者や行政官に養成されうるかといったことではないのです。

しかしさらに、大学には、以上のこととはべつに、学生に提供すべきことがあります。そして、そのことをわたしは、大学の [学生にたいする] もっとも [大学らしい] 特徴的な贈りものであると考えています。なぜなら、その贈りものは、ほかならぬ大学のみ属しているのですし、また、はじめでもおわりでもない中間としての大学教育の性格に根ざしているからです。ひとは人生のいかなるときでも、学び [学問] の [そのひとにとって] あたらしい分野を開拓しはじめることができますし、はじめての活動に従事することができます。しかし、かれが、自分の時間とエネルギーのかぎられた資源を配列しなおすということなしにこれをなしうるのは、大学においてだけです。というのも、大学以後の人生においては、かれはあまりにもおおくのことがらに自分をしばってしまいますので、それを投げ捨てることは容易ではないのです。大学の [学生に贈る] 特徴的な贈りものは、幕間 (interval) という贈りものなのです。ここにあるのは、青年期のさしせまった義務を棚上げし、しかしだからといって、その代わりになるようなあらたな忠誠を同時に誓う必要もないという、そうしたひとつの機会です。ここにあるのは、とりかえしのつかないできごとの暴君的な流れのなかでの中断 (a break) [息ぬき] です。すなわち、世界と自分自身についていろいろなしかたで考えをめぐらし、しかしそうしているあいだに、敵の気配を背後に感じることもなく、また、決断しなければならぬというたえざるプレッシャーからも自由である、そうした期間です。また、神秘をあじわいながら、同時にその解決をさがす必要もない、というそういう瞬間です。しかも、こうしたことのすべてが、[いわば] 知的な真空のなかでおこなわれるのではなく、継承されてきたすべての学識、そして、われわれの文明がつくりだしてきた文献と経験にとりかこまれておこるのです。しかも、ひとりぼっちではありません。おなじ精神をもった仲間が同行してくれます。かれの勉強は単一の仕事

ではなく、認知された学問分野を研究するためのディシプリンにともなわれています。そしてかれの教育は、まったくの初等教育（つまり、どう行動しどう考えるかをまったく知らない人びとのための教育）でも、裁きの日〔死〕にむかうひとのための最後の教育でもなく、ちょうどその中間としての教育です。こうした幕間〔としての大学教育〕は、一息つくための休憩のように陳腐なものでは決してありません。もしそうだったら、そんな機会にたいしてどんな若者も「ありがとう」などと言わないだろうとわたしは思います。というのも、そうした幕間は、活動の停止なのではなく、他に類のない活動の機会だからです。

このような注目すべき機会がいつごろからできたのかを決定することはなかなかむずかしい。おそらく、(ルクレティウスが人間の手足がそうやって発生したと想像したように) さまざまな程度においてそうした機会を利用できる人びとがいたということから発生したのでしょう。いずれにしても、この機会は、ヨーロッパにおけるすべての大学が、あるしかたで、その学生たちにたいして提供しているひとつのことからです。その機会を享受するためには、あらかじめなんらかのしかたでの準備ができていなくてはなりません(だれであれ、保育園で学んでいなければならないことを身につけていなかったら、そうした機会を利用できるとは期待されえないでしょう)。しかし、その機会を享受するために、あらかじめ存在する特権として定義されるようなものが必要であるとか、結局のところ生計をかせぐ必要がないという身分が必要であるといったことはありません。そうした機会の享受は、それ自体、「学生 (student) [研究する者]」であることの特権なのです。すなわち、スコレー (scholē) (余暇) の享受なのです。あえて誤解をおそれずにいえば、この点を、大学の性格についてのひとつの理論にまで濃縮することもできるでしょう。すなわち、それを、合間 (interim) の理論と呼ぶこともできるでしょう。しかし、こうした理論は、かの〔新学期がはじまる〕十月一日の朝、この機会が学生にどんなふうに感じられるかということをとてみじか

に表現するものにすぎないとも言えます。ほとんど一夜にして〔その日の朝になってみると〕、不快な事実からなる世界は溶け去り、無限の可能性と化しています。どんな「有閑階級」にも属していないわれわれは、つかのまではあっても、アダムの呪い、すなわち、仕事と遊びとのあいだの耐え難い区別から解放されたのです。われわれのまえにひらけているのは、一本の道ではなく、はてしなくつづく海原です。というのも、それは、自分の帆を風にむかってひろげるのに十分なほどひろいからです。直接むかうべき目的地はなく、そうした目的地があるということからくる落ち着かない緊急性もありません。義務はもはや重くのしかかってはいません。退屈や失望ということも、いまや意味のないことばです。死も考えることすらできません。しかし、〔かならず〕おわりがくるということは、合間ということの性格に属しています。というのも、すべてのものには時があり、なにごとにもその時をこえてはつづかないからです。永遠の学生とは、進むべき道を見失った魂 (a lost soul) のことなのです。

ところで、〔大学教育の〕成果についてはどうでしょう。このような大学から、なんの刻印もうけずにでていく者はひとりもいません。知的には、かれは、ある知識を獲得したと想定されるでしょう。そして、それよりもっと重要なことなのですが、ある種のこころの規律、ことからの帰結をつかまえる能力、かれ自身の諸能力にたいするよりいっそうの支配力といったものを身につけたと想定されるでしょう。おそらく、かれはつぎのようなことを知っているでしょう。すなわち、「意見 (a point of view)」をもつだけでは十分ではない、必要なのは思考 (thoughts) のものだ、ということです。かれが大学をでていくとき、かれがもっているのは、かれが信じていることからの真理性を証明するための論拠という武具一式ではなく、かれ自身を知的フリーガンのおよぶ範囲からつれだしてくれるなにかをかれは獲得しているでしょう。そしてかれの研究のテーマがなんであれ、かれは、人類をおおきく動かしてきたことからのなかにある意味をさがしだすことができると期待される

でしょう。おそらくかれは、自分の知的な愛好の中心になるものを見いだしてすらいるでしょう。ひとことでいえば、かれが大学ですごしたこの時期は、生計をかせぐためには、それほどたいしたものをかれにあたえはしなかったでしょう。しかし、かれがより意味のある生活をおくることをたすけてくれるためのなにかをかれはそこで学んだことでしょう。そして、道徳的にはどうでしょうか。かれが獲得したのは、道徳的な諸観念の一式でも、道徳的衣履のあるあたらしいできあいのスーツでもないでしょう。かれがえたものは、かれ自身の道徳的感受性をおしひろげる機会であり、青年期特有の声高にたがいに衝突しあっているような絶対的な思いこみを、もっとこわれにくいなにかとおきかえるための余暇だったでしょう。

学びをもとめることが、他のすべての偉大な活動と同様、保守的であることは避けがたいことです。大学は、風のちょっとした動きもとらえてしまうためにたえず小刻みに揺れる小舟のようなものではありません。大学が耳をかたむけるべき批判者は、学びをもとめることに関心がある人びとであって、大学が、それがあるところのものとはちがったなにかではないがゆえに不完全であると考える人びとではありません。しかし、あるしかたで、大学の観念は最近、「高等教育 (higher education)」とか「高等トレーニング (advanced training)」とか「成人のためのリフレッシュ・コース」といった知見とごったまぜになっています。これらの知見は、それ自体としてはたいへんけっこうなことです。しかし、実際においては、大学とは縁もゆかりもないものなのです。そして、そろそろ、こうした混乱を解きほぐすためになにかをなさなければならないときです。というのも、これらの知見が属しているのは、力と有用性の世界であり、搾取〔開発〕の世界であり、社会的かつ個人的なエゴイズムの世界であり、その意味が、それ自身の外部におけるある些末な結果や達成によって左右されるような諸活動の世界だからです。そして、このような世界は、大学が属している世界ではないのです。それ〔そうした知見が表現する世界〕は〔たしかに〕きわめて強力な世界です。

というのも、その世界は、金持ちで、他人にちょっかいをだし、しかも、善意でそうしたことをやってもいるからです。しかし、その世界は、とりたてて自己批判的というわけではありません。というのも、それはしばしば、自分自身を世界の全体ととりちがえる傾向があるからです。また、愛すべき無頓着さで、自分自身の目的に貢献しないものはなんであれ、いくぶんまちがっていると想定するからです。大学は、このような世界の保護をうけることにたいして用心する必要があります。さもないと、大学はつぎのようなことどもを発見することになるでしょう。すなわち、世界の諸言語や諸文学を研究したり教えたりするかわりに、通訳をトレーニングするための学校に大学が〔いつのまにか〕なっていたり、科学を探究するかわりに、電子技術者や産業に従事する化学者をトレーニングすることに大学が〔いつのまにか〕従事していたり、歴史〔そのもの〕を研究するかわりに、大学が〔いつのまにか〕あるべつな目的のために歴史を研究したり教えたりすることになっていたたり、男と女を教育するかわりに、大学が〔いつのまにか〕まさに社会におけるある適所〔人材要請〕をみたすためにかれらをトレーニングすることになっていたりする、ということです。

大学は、他のすべてのものと同様、それが属している社会のなかにある場所をもっています。しかし、その場所は、その社会におけるある他の種類の活動に貢献するということとその機能〔職務〕としているのではなく、それ自身であること、そして、それ以外のものになってはならないことをその機能〔職務〕としているのです。その仕事の第一は、学びをもとめることです。大学において、その不在の埋め合わせになるようなものはなにもありません。その仕事の第二は、この〔学びをもとめるという〕活動の過程で生じてくるものが〔はっきりと〕認められるような種類の教育です。〔したがって〕大学が大学でなくなるのはつぎのようなときです。すなわち、大学の学び〔学問〕が、今日リサーチと呼ばれているようなものに墮落してしまったとき、そして、大学の教育 (teaching) がたんなる教習〔知識としての知識の伝

達] (instruction) になり、しかもそれが、学生の時間の全部を占めてしまうとき、そして最後に、教えられるためにやってくる者たちが、かれらの知的なためのもともめてやってくるのではなく、すでにあまりにも活力をうしない疲れはてているので、かれらがもとめるのはただ、すぐに役に立つ知的・道徳的な道具一式を身につけることだけ、といったありさまになったとき、すなわち、かれらが、会話の作法をまったく理解せずにやってきて、しかし、生計をかせぐための資格や、かれらを世界の取奪にむけてときはなつための卒業証書だけはほしがらなくなったときなのです。

(さくらい・なおふみ 法学部教授)